

職業高校からの大学入学者の分析

—入学方法・進学分野および適応状況—

山村滋, 鈴木規夫, 濱中淳子 (大学入試センター)

わが国の大学進学率を引き上げた要因のひとつに、いわゆる職業高校からの進学者の増加が挙げられる。しかしながら、職業高校からの進学者を対象とした研究はほとんどなされていない。そこで、本稿では職業高校出身者の大学への入学方法・進学分野の実態および適応状況について分析を行った。なお、分析には筆者等が2006年に実施した全国的な調査データを用いた。

1 はじめに

本稿は、いわゆる職業高校からの大学進学者を対象として、入学方法の実態および適応状況に関する分析を行うことを課題とする。

周知のようにわが国では大学・短大進学率が5割を超え、大学ユニバーサル化段階に到達している。こうした動向には、普通科からの出身者の増加とともに、従来はあまり進学していなかったいわゆる職業高校からの進学者の増加が反映している。文部科学省によれば、平成2年度における普通科からの進学者は37.7%、いわゆる職業高校からの進学者は8.3%であったのに対し、平成19年度には、前者が59.9%、後者が22.2%となっている²⁾。これを比率で表せば、前者が1.6倍、後者が2.7倍となり、職業高校からの伸びが大きいことが指摘できる。

ところで、職業高校からの進学者に関して、どのような入試研究(入学者選抜方法・高大接続の改善)が行われてきたのであろうか。結論的に述べれば、ほとんど研究はなされていない。個別の大学での入試研究において、管見の限りでは「職業高校出身者」に焦点を当てたものは見あたらない。また、教育社会学的な観点から進学アスペレーションに焦点を当てた研究として、中

村(2006)の研究が挙げられる。しかし、入試研究という視野で捉えるならば、接続の観点から高校での教育課程に着目し、普通科との差異を論じたものとして佐藤(2000)の研究があるのみとあってよいであろう。佐藤の研究は、大学進学上、職業高校の教育課程では普通教科(国語、数学、英語、理科、地理歴史、公民)に関しては、せいぜい1教科に限定しなければ、普通科と同程度の学習時間が確保出来ないこと、したがって、普通教科の学習量で見ると、大学での学習に普通科出身者に比べてハンディを負わざるを得ないことを明らかにしている。同時に佐藤は、高校時代に先取りした専門に関する学習内容が、大学入学後の学習に活かされる可能性を指摘している。

佐藤の研究は、高校の教育課程を分析したものであるが、職業高校で学び、大学に入学した者を対象として以下の2点を検討することが求められているのである。第1に、高校での専門分野の学習が大学での専門分野と関連がある場合、大学での学習にとってプラスに作用しているのか否か。第2に、もし、高校での専門分野とは異なる分野へ進学したとすると、高校で先取りした専門分野の学習は活かないため、普通教科の学習量のハンディにより、大学での学習が困難になる可能性が高いのではないか。

今後、職業高校からの進学者が増加することはあっても減少する可能性は低いであろう。したがって、職業高校出身者をターゲットとする研究は必要不可欠である。そこで本稿では、先行研究の全般的状況と佐藤の研究を踏まえ、職業高校出身の大学入学者がどのような選抜方法によってどのような専門分野へ入学したのか、そして、彼らは、大学の専門分野に適応しているか否かを明らかにすることを課題とする。

なお近年、大学の初年時教育の重要性が広く認識され、研究も蓄積されつつある(山田 2005, 濱名・川嶋 2006, など)。初年時教育の中身を考えようとする際に、本稿におけるような分析—どのような高校出身者が、どのような選抜方法で、どのような専門分野に進み、彼らがいかなる適応状況にあるか—を把握しておくことは是非必要である。今後、このようなデータを積み重ねることが初年時教育の観点からも求められているのである。

2 データ

本稿で利用するデータは、大学入試センター研究開発部試験基盤設計研究部門が 2006 年秋に実施した『高校の科目履修と進路設計等に関する調査』の回答に基づくデータセットである。同調査は、2006 年度時点で設置されている全国の大学・学部のなかから 600 学部を単純ランダムサンプリングによって抽出し、当該学部の大学 1 年生各 100 名を上限として回答をお願いしたものである。476 学部より、36,584 名分の回答が得られた。このうち、海外の高校出身者や回答が不備なもの等を除く 35,662 名分が本データセットである。なお、このなかには大学 2 年生以上の回答も含まれており大学 1 年生に限定すると 34,802 名分となる³⁾。今回は、このデータセットから職業高校出身者を抽出し分析対象とする。

3 分析の順序と方法

分析は以下の順序で行う。第一に、職業高校出身者の入学方法(選抜方法)の実態を把握する。第二に、職業高校出身者の出身学科と大学での専門分野の関係を明らかにする。第三に、専門分野への適応状況について検討を加える。その際、普通科出身者との比較および出身学科と専門分野との関係を分析の視点とする。最後に、高校での成績と適応状況の関係を解明する。

なお、専門分野への適応状況に関しては、柳井(1993, 2002)によって作成・利用されている学生への以下の 8 つの質問項目を利用する。

問 あなたは、現在、所属している大学の専門分野(学部・学科)についてどう思っていますか。各項目についてあてはまる番号を 1 つ選んで マークして下さい。

1. 自分の性格にあっている
2. 自分の興味・関心にあっている
3. 自分の能力を生かすことができる
4. 高校時代の得意科目を生かすことができる
5. 希望する職業に就くことができる
6. 自分の求めている生き方ができる
7. 現在の専門を学んでいることを誇りに思う
8. 新しく自分の専門を学び直せるとしてもやはり現在の専門を選ぶ

これらについて、そう思わない=1, あまりそう思わない=2, ある程度そう思う=3, そう思う=4, とし得点化した。

柳井らの 1993 年の調査研究において、8 項目間の相関係数はすべて正であり、主成分分析によると第 1 主成分の寄与率は 44% であることから、8 項目の得点を加算して適応度得点を求める根拠が示されている。上記のわれわれの調査データにおいても、柳井と同様の方法が採れることを確認した。主成分分析の結果、分散の 54% を説明する

一つの主成分が得られた⁴⁾。それぞれの項目の主成分負荷量は「得意科目を生かせる」が0.54でやや低い、他は0.7以上の値が得られた。また、信頼性の指標である α 係数は0.872であった。柳井(1993)によると、主成分負荷量はこの項目(「得意科目を生かせる」)を除いてほぼ0.6以上の値を示し、また α 係数は0.804であったので、今回のデータも柳井が収集したデータと大きな相違はないと言える。

次に、適応度得点をもとに適応度に関して以下のように3群に分けた。すなわち、低適応群および高適応群がおおよそ20%ずつを占めるようにして、適応度得点8-18を低適応、19-26を中適応、27-32を高適応として分析に用いた。

4 職業高校出身者の選抜方法および出身学科と大学での専門分野の関係

4.1 選抜方法

表1は選抜方法別の入学者の分布を、表2は、入学者の大学ランク別⁵⁾の分布を示す(ランク1:偏差値60以上, ランク2:偏差値50以上60未満, ランク3:偏差値40以上50未満, ランク4:偏差値40未満)。全体的な傾向と比較すると、職業科出身者は大多数が推薦・AOにより入学しており、

一般入試による入学者は僅かであることが指摘できる。また、大学ランク別に見ると、大学ランク1の大学への入学者はほとんどいないこと、一般入試での入学者は大学ランクにかかわらず1割未満であること、大学ランク4では、AO入試による入学者の割合が相対的に大きいこと、が指摘できる。

4.2 高校学科と大学での専門分野

では、彼らは、どのような専門分野に入学したのだろうか。そしてそれは高校時代に所属していた学科といかなる関係にあるだろうか。表3は、出身学科と専門分野との関係を示したものである。

工業科出身者は657名いたが、そのうち工学系へは48%と約半数が進学している。次に多いのが社会科学系の147名(22%)、次いで人文科学系40名(6%)、芸術系35名(5%)となっている。こうしてみると、文系の専門分野へかなりの者が進学していることがわかる。

農業科では出身者159名のうち、農水産系への進学者は、約半数の80名である。次いで多いのが社会科学系33名(21%)である。あとは、10名以下であるが、社会科学、人文科学および芸術系を合計すると、44名(28%)となり農業科も工業科と同様、文

表1 選抜方法別の入学者の分布

	一般	推薦	AO	内部進学	その他	合計(%)	N
職業科	7.3	72.1	14.5	2.3	3.8	100.0	1,809
全体	57.8	30.2	6.0	3.3	2.7	100.0	34,335

表2 職業科出身者の選抜方法別の入学者の分布 (大学ランク別)

大学ランク	一般	推薦	AO	内部進学	その他	合計(%)	N
1	0.0	50.0	0.0	0.0	50.0	100.0	2
2	7.3	81.9	6.2	0.6	4.0	100.0	177
3	8.0	76.9	8.7	2.2	4.2	100.0	804
4	6.7	65.5	22.0	2.7	3.2	100.0	826

ランク1:偏差値60以上, ランク2:偏差値50以上60未満, ランク3:偏差値40以上50未満, ランク4:偏差値40未満

表 3 高校での学科と大学での専門分野

高校学科	大学での専門分野										合計(%)	N
	人文科学	社会科学	理学	工学	農水産	保健	家政	教育	芸術	その他		
農業科	3.8	20.8	5.7	3.8	50.3	4.4	2.5	1.9	3.1	3.8	100.0	159
工業科	6.1	22.4	3.5	47.8	0.6	3.7	0.8	3.4	5.3	6.5	100.0	657
商業科	12.4	64.8	0.4	2.7	0.1	2.6	2.5	6.5	1.9	6.1	100.0	693
水産科	12.5	25.0	0.0	12.5	43.8	0.0	0.0	0.0	0.0	6.3	100.0	16
看護・福祉科	10.3	51.7	0.0	0.0	0.0	22.4	1.7	8.6	0.0	5.2	100.0	58
家庭・家政科	8.3	9.2	0.0	0.0	1.8	20.2	46.8	8.3	3.7	1.8	100.0	109
N	149	673	35	341	94	84	78	84	57	97		1692

系へかなりの割合で進学していると言える。

一方、商業科に関しては、683名中、社会科学系449名(65%)、人文科学系86名(12%)であり、この二つの系統で8割近くを占めている。このように、商業科に関しては、上記の工業科、農業科とは傾向が異なっている。

また、家庭・家政科109名に関しては、家政系への進学者が51名(47%)と半数弱である。次いで保健系に22名(20%)が進学している。

5 職業高校出身者の適応状況

5.1 適応状況

5.1.1 普通科出身者との比較

果たして彼らは大学で適応しているのだろうか。まず、適応状況に関して、普通科出身者との比較を行おう。その際、適応度と大学入学難易度(大学ランク)は正の関係があることがわかっている(山村他2009)ので、大学ランク別に比較することにする。表4および表5は、適応度を3段階に分け、大学ランク別に見た普通科出身者・職業科出身者の適応度の分布である。なお職業科出身者で大学ランク1の学生データはわずか2名分なので、除外して考えることにする。ランク2の場合、職業科出身者は普通科出身者に比べて、高適応の割合が高く、低適応の割合が少ないことが注目される。なお、ランク3およびランク4においては、普通科出身と職業科出身で、分布には相違がほぼないと言えよう。

5.1.2 出身学科と専門分野の関係

次に、適応状況について出身学科と専門分野の関係を分析しよう。表6～表8は、出身学科ごとに各専門分野別に見た場合の適応度の分布を集計したものである。なお、ここでは、サンプル数の少ない出身学科は除き、工業、商業、農業の3学科にしほり専門分野に関して集計した。

まず、農業科から見ていこう。農水産系への進学者は低適応15%、中適応57%、高適応28%であった。一方、社会科学系への進学者は、低適応34%、中適応56%、高適応9%である。こうしてみる、といわゆる文系の専門分野へと進んだ場合、低適応が出やすいように思われる。

次に工業科。工学系への進学者は低適応13%、中適応52%、高適応23%であった。一方、社会科学系への進学者は低適応44%、中適応51%、高適応5%、同様に人文科学系への出身者は、低適応34%、中適応53%、高適応13%であり、農業科と同様に、いわゆる文系の分野を専門にした場合、低適応が出やすいように思われる。

では、商業科ではいかがであろうか。表8からわかるように、人文科学・社会科学以外の分野へ進学した者は少ないので、評価しがたい。そこで、工業科から工学系、商業科から社会科学系への進学者を、普通科から工学系および社会科学系へ進んだ学生とともに、それぞれ適応度を比較してみよう。

表 4 普通科出身者の大学ランク別適応度

	低適応	中適応	高適応	合計(%)	N
大学ランク1	10.4	54.9	34.7	100.0	2960
大学ランク2	17.5	59.5	23.1	100.0	10309
大学ランク3	19.8	58.5	21.7	100.0	11862
大学ランク4	29.4	54.7	15.9	100.0	4041

表 5 職業科出身者の大学ランク別適応度

	低適応	中適応	高適応	合計(%)	N
大学ランク1	0.0	100.0	0.0	100.0	2
大学ランク2	13.1	57.7	29.1	100.0	175
大学ランク3	18.1	60.5	21.4	100.0	779
大学ランク4	27.2	57.7	15.1	100.0	809

表 6 農業科出身者の専門分野別の適応度

	大学での専門分野									
	人文科学	社会科学	理学	工学	農水産	保健	家政	教育	芸術	その他
低適応	0.0	34.4	0.0	16.7	15.2	0.0	25.0	0.0	20.0	0.0
中適応	100.0	56.3	87.5	83.3	57.0	42.9	75.0	100.0	60.0	83.3
高適応	0.0	9.4	12.5	0.0	27.9	57.1	0.0	0.0	20.0	16.7
合計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	6	32	8	6	79	7	4	3	5	6

表 7 工業科出身者の専門分野別の適応度

	大学での専門分野									
	人文科学	社会科学	理学	工学	農水産	保健	家政	教育	芸術	その他
低適応	34.2	43.8	26.1	13.4	25.0	17.4	0.0	4.6	0.0	14.3
中適応	52.6	51.1	52.2	63.5	50.0	65.2	80.0	40.9	51.6	59.5
高適応	13.2	5.1	21.7	23.1	25.0	17.4	20.0	54.6	48.4	26.2
合計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	38	137	23	299	4	23	5	22	31	42

表 8 商業科出身者の専門分野別の適応度

	大学での専門分野									
	人文科学	社会科学	理学	工学	農水産	保健	家政	教育	芸術	その他
低適応	22.4	24.9	33.3	11.8	100.0	33.3	11.8	18.6	8.3	29.3
中適応	51.8	62.6	66.7	76.5	0.0	50.0	64.7	51.2	58.3	48.8
高適応	25.9	12.6	0.0	11.8	0.0	16.7	23.5	30.2	33.3	22.0
合計(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	85	430	3	17	1	18	17	43	12	41

5.1.3 工学系への進学者の適応度の比較

表 9 は、工業科および普通科から工学系へ進んだ学生の適応度の分布である。大学ランク 2 の場合、工業科出身者は僅かに 19 名であるので評価は留保し、大学ランク 3 および 4 について見ていこう。この表から

わかるように、ランク 3・4 とともに、工業科出身の方が高適応者の割合が高く、低適応者の割合が低いことが指摘できる。

5.1.4 社会科学系への進学者の適応度の比較

表 9 工学系への進学者の適応度の比較 (工業科および普通科出身者)

大学ランク2					
	低適応	中適応	高適応	合計(%)	N
工業科	21.1	42.1	36.8	100.0	19
普通科	20.1	65.7	14.2	100.0	721

大学ランク3					
	低適応	中適応	高適応	合計(%)	N
工業科	10.7	66.7	22.6	100.0	168
普通科	24.1	63.2	12.7	100.0	1533

大学ランク4					
	低適応	中適応	高適応	合計(%)	N
工業科	16.1	62.5	21.4	100.0	112
普通科	20.9	62.5	16.6	100.0	301

表 10 社会科学系への進学者の適応度の比較 (商業科および普通科出身者)

大学ランク2					
	低適応	中適応	高適応	合計(%)	N
商業科	10.3	73.5	16.2	100.0	68
普通科	25.8	59.1	15.3	100.0	2516

大学ランク3					
	低適応	中適応	高適応	合計(%)	N
商業科	19.0	63.7	17.3	100.0	179
普通科	29.5	58.4	12.1	100.0	2499

大学ランク4					
	低適応	中適応	高適応	合計(%)	N
商業科	38.1	57.4	6.6	100.0	183
普通科	38.5	50.8	10.7	100.0	1453

表 10 は、商業科および普通科から社会科学系への進学者の適応度の分布を示したものである。大学ランク 2 では、高適応者の割合はほぼ同等であるが、商業科出身の方が、低適応者が 15 ポイント少ないことが注目される。大学ランク 3 においては、商業科出身の方が、高適応者の割合が 5 ポイント多く、また低適応者の割合が 11 ポイント少ないことが指摘できる。一方、大学ランク 4 においては、商業科出身の方が、高適応者の割合が 4 ポイント少ない。しかし、中適応者の割合は、7 ポイント高い。以上のように、社会科学系の専門分野においては、商業科出身の方が普通科出身者に比べて、おおむね適応しやすい傾向があると言えるであろう。

5.2 高校での成績と適応状況の関係

最後に、高校での成績と適応状況の関係

を探ってみよう。ここでも、サンプル数の関係で、ある程度サンプル数が確保できる工業科から工学系進学者および商業科から社会科学系への進学者を対象とする。そして、工業科出身者の高校での成績に関して、試みとして、数学および物理と化学の成績と適合度の関係、および、商業科出身者の国語および英語と適合度との関係を検討することにする。

表 11 は工学系へ進んだ工業科出身者の高校時代の 5 段階の自己評価による数学と物理・化学の成績の和 (数学のウェイトを 2 倍にしてある) を高・中・低の 3 段階に分けた⁶⁾ものの適合度の平均値・標準偏差・分散分析の結果を示したものである。この表からわかるように、高校時代の成績が良い方が、大学での専門分野により適応しているという傾向がある。

表 11 工学系への進学者の適応度得点の
平均値・標準偏差・分散分析

工業科から工学系			
成績	平均値	標準偏差	N
低	21.4	3.87	23
中	23.0	4.52	107
高	24.7	5.40	58
F値=4.78 p<0.01			

次に商業科に関して見てみよう。表 12 は、商業科からの社会科学系への進学者について、工業科の場合と同様にして、国語と英語の成績の和を高・中・低の3段階に分けたものの適合度の平均値・標準偏差・分散分析の結果を示したものである。国語と英語の成績が良かった学生ほど、大学での専門分野へよく適応しているということになる。

表 12 社会科学系への進学者の適応度得点
の平均値・標準偏差・分散分析

商業科から社会科学系			
成績	平均値	標準偏差	N
低	19.6	4.56	98
中	21.5	4.77	245
高	23.8	4.24	75
F値=17.56 p<0.01			

6 おわりに

本稿での主な分析結果は以下のとおりである。

- ①職業科からの大学入学者の8割以上は、推薦・AOによって入学している。
- ②工業科出身者は工学系への進学が約半数であるが、社会科学系や人文科学系へもかなりの程度進学している。
- ③農業科出身者は農水産系への進学が約半数であるが、社会科学系や人文科学系へもかなりの程度進学している。
- ④商業科出身者は社会科学系・人文科学系へ進学する者がほとんどである。

⑤職業科出身者の専門分野への適応状況は、普通科出身者に比べて劣ってはいない。とりわけ、工業科から工学系、商業科から社会科学系への進学者は、普通科出身者に比べて適応しやすい。

⑥一方で、農業科および工業科から社会科学系・人文科学系へ進学した場合は、農業科から農水産系、工業科から工学系に進んだ場合に比べて、低適応が出やすい⁸⁾。

⑦工業科・商業科出身者の高校時代の成績と適応度との間には正の関係がある。

⑧の農業科や工業科からいわゆる文系分野へ進学した場合、不適応が出やすいことは、佐藤の研究から導き出された論点に関して、以下のように言えるのである。すなわち、高校での専門分野とは異なる分野へ進学したとすると、高校で先取りした専門分野の学習は活かないこと、かつ、普通教科の学習量のハンディがあることが、大学での学習を困難にしている可能性が高いということである。

一方、⑤の工業科から工学系、商業科から社会科学系への進学者は、普通科出身者に比べて適応しやすいということは、高校での専門分野の学習が、大学での専門分野と関連がある場合、大学での学習にとってプラスに作用している可能性が高いことを示しているのである。今後、高校時代の専門科目の履修歴・成績と大学での成績・専門分野での適応とはいかなる関係にあるのかに関して分析を進めることを課題としたい。

なお、濱中ら(2009)は適応得点と高校時代の成績および進学動機の相関係数の分析から、適応得点に対して、進学動機の方が高校成績に比べてより大きい影響力を与えていることを明らかにしている。そうであるならば、工業科出身の工学系進学者、商業科出身の社会科学系進学者は普通科から

それらへ進んだ学生に比べて進学動機が強いのではないだろうか。それは工業高校や商業高校での学習内容や進学指導が動機付けを強めている可能性を示唆している。この点について探求することも今後の課題である。

注

- 1) 周知のように高校の学科は、高等学校設置基準に基づき、①普通教育を主とする学科、②専門教育を主とする学科、③普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科に大別される。そして、②にはいわゆる職業高校で設置されている、たとえば工業に関する学科の他に、理数科や体育学科等も含まれる。そこで本稿では、これらを区別するために、農業科、工業科、商業科、水産科、看護・福祉科、家庭・家政科を職業科として扱い、これらの学科を設置している高校を職業高校と呼ぶことにする。
- 2) 文部科学省の以下の URL より。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/genjyo/021202.htm
- 3) 表 13 に母集団とサンプルの学部系統別の分布を示す。サンプルは母集団に比べて医学系、理学系および教育系の割合が高く、社会科学系、工学系およびその他の割合が低い。このように学部系統別に見た場合、サンプルの分布にやや歪みがあることを指摘しておきたい。
- 4) 8 項目間の相関係数は、すべて正であった (表省略)。また、表 14 に 8 項目の主成分分析を示す。

表 13 学部系統別母集団とサンプルの分布

学部系統	母集団	サンプル
人文科学系	17.6	15.4
社会科学系	34.5	27.0
理学系	2.3	6.7
工学系	16.1	9.9
農学系	2.8	3.4
医学系	8.4	16.9
家政学系	2.8	3.1
教育学系	4.4	9.7
芸術系	2.2	4.0
その他	8.9	4.0
合計%	100.0	100.0
N	603,054	32,224

注：母集団のデータは文部科学省(2006)によった。

表 14 8 項目の主成分分析

	第 1 成分
性格合致	0.762
興味等合致	0.805
能力生かせる	0.778
得意科目	0.539
就きたい職業	0.700
生き方	0.774
誇り	0.754
現在の専門	0.733
寄与率	54%
α 係数	0.872

- 5) 大学ランクは駿台予備校 (2006) の偏差値によった。
- 6) 成績高と成績低はそれぞれ約 20%を占めるように設定した。
- 7) 成績高と成績低はそれぞれ約 20%を占めるように設定した。
- 8) このような学生が生まれることに関しては、以下のような可能性が考えられる。第一に、大学側 (選抜する側) が、学生確保のために、適性等をあまり考慮せずに推薦・AO 入試を利用して学生を受け入れている可能性である。第二に、彼らが文系分野へ進んだ理由として、工業科や農業科への不本意入学や高校への入学後の不適應により彼らが文系分野へ進んだ可能性である。

文献

- 濱名篤・川嶋 太津夫(2006).『初年次教育——歴史・理論・実践と世界の動向』丸善.
- 濱中淳子・山村滋・鈴木規夫(2009).「<大学適応観>の構造——高大接続対策の効果を探る」.『大学入試研究ジャーナル』19: 115-120.
- 文部科学省(2006).『平成18年度学校基本調査報告書(高等教育機関編)』文部科学省.
- 中村高康(2006).「専門学校からの大学進学——アスピレーションの推移の分析から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』32: 125-144.
- 佐藤広志(2000).「職業科高校の分析——職業科高校卒業生の学習歴」荒井克弘(編)『学生は高校で何を学んでくるか』大学入試センター,

85-101.

- 駿台予備校(編)(2006).『大学選びの決定版! 大学受験ガイド』(2007年度版)高橋書店.
- 山田礼子(2005).『一年次(導入)教育の日米比較』東信堂.
- 山村滋・鈴木規夫・濱中淳子(2009).「大学入学者選抜方法と選抜方法および適応状況」.『大学入試研究ジャーナル』, 19: 107-113.
- 柳井晴夫(編)(1993).『大学の各専門分野の進学適性に関する調査研究報告書——大学入学者選抜資料としての適性検査のための基礎研究』大学入試センター研究開発部.
- 柳井晴夫(編)(2002).『大学生の学習に対する意欲等に関する調査研究』大学入試センター研究開発部.